

津高同窓会報

発行所

津市新町3丁目1-1

津高等学校
同窓会事務局

TEL・FAX 059-229-7331

共立印刷株式会社

君の笑顔が今日輝く



戦後六十年目の夏

同窓会長 川喜田 貞久 (昭和27年卒)



とする、資本主義は大きくなろうとする」と言われました。当時はEUの議論が盛んだった時代です。資本主義が大きくなろうとしていたのです。同時に民主主義的な考え方が世界に広まると、民族抗争が増えるだろうと言われました。その通りになりましたね。

八月になると第二次世界大戦に関する報道が増えます。人類の愚かさを考えます。ドイツが焼け野原になりヒトラーも平常心を失いつつある敗戦直前でもドイツ軍の上層部では権力争いをしていたと伝えていました。

出版事業がこんなに社会的意義を持つものか、と思われたのは、日本漢

字能力検定協会が出している三冊の本を知った時です。小学校一・三年生向け「なかよし」。小学校四・六年生向け「親切・感謝」。

中学高校生向け「自立と共生」。いずれも「心を耕すシリーズ」となっています。シリーズ名と各冊の題を見て「いいな」と思いました。そして内容ですが、山本有三、島崎藤村、宮沢賢治、有島武郎、芥川龍之介など一流作家の美しい文章が各冊二〇編以上入っています。各冊千円。安い。合間にフリガナ、書き順など検定



タイトル・書「平成17年度同窓パーティーテーマ」

千草光洞 (昭和23年卒)

絵「工作課程」佐藤紀子 (昭和28年卒)

協会らしいものも入っていますが、これも工夫されていて子供の好奇心に訴えるでしょう。大人も面白く読めると思います。小学一・三年向けに、永島直昭の「黄金のりんご」が入っています。ある優れた王様の話です。絶対に戦争はしない。攻められても反撃はしない。そして人徳があり相手も戦争をしなくなる。ところがこの王様が死ぬとあちこちで戦争が始まった、という

お話です。これは少し危険な話です。一人の王様に総てが託されて平和が保たれる。作者の意図は判りませんが単なる平和願望だけで神の出現を期待するのでは平和はこないでしょう。最近トインビーが世界の平和はインド以东の多神教の哲学が必要だ、と言っていることを知りました。頑張れ、多神教。

創立二五周年記念事業	2・3	高齢者同人誌「群獣」	6	同窓会東京都府県別分布表	11
共に生きるために	4	友情と夢	7	鳥羽前副会長追悼	11
北斗七星を語る	4	「井真成」の雑誌のことなど	8	津高校進路事情	12
一年間だけの津中生	5	通俗常識の「法と経済学」	8	清水大輔君・国体で優勝	13
九十八歳 日目これ好日	5	音楽の都・ウィーン	9	新理科棟竣工	13
誓子句碑の前で	6	就任「あいさつ」	10	各地で同窓会開催	14

ご挨拶



学校長 水越利幸

会員の皆様には、ご健勝にて、活躍のこと、お慶び申し上げます。

平素は、本校教育活動に暖かいご支援、ご協力を賜り、心から感謝申し上げます。今年は創立一二五周年の記念

「君の笑顔が、今日輝いて」をテーマに約八〇〇人の会員の皆さまがご集まりになり、そのパワーをいただきました。

行事がいろいろと催されました。五月のゴルフコンペ、七月に同窓会美術展が開催、大変多くの作品が出品され、在校生にはいい刺激となりました。また、彫塑部門に出品された岩井(林)久子様(昭和22年卒)より「地球のなしみ」と題したミニチュメントを新理科棟の建設記念として贈呈していただきました。

さて、今年は戦後六〇年ということ、各地で様々な行事が例年以上に行われました。私ごとですが昭和二十一年に生を受けて、戦後とともに歩んできたことになりました。戦中戦後の苦しい時代のことをよく耳にはしますが、子供時代にはそれが普通の生活だと思っていました。「水」や「食物」など勿体ないとの感覚は今も残っていますね。今よりも生きていくことにずっと苦し

いものだったにも係わらず、何かしら活力に満ちていたと思います。楽しさ・楽しみのあった時代背景だったのですね。

四年前に津高校に赴任して、母親が津高等女学校(三重校)の卒業であることを聞き、名簿に記載されているのを見た時はある種の感慨を覚えました。同時に津高校が歴史ある伝統校としての位置(実績)を保つためにも、校長として頑張らなければと感じた次第です。そして、今、教育改革の流れの中にあつて、生徒、保護者、地域の方々に、より満足のできる教育を提供

するため、本校の教育改革方針や学校経営品質の二つのツールを使って本校教育の活性化を図っていきたいと思っています。会員の皆様には本校に対して、叱咤激励していただくとともに、今後一層のご協力をお願いするものです。

最後になりますが、会員の皆様のご健康とご発展をお祈り申し上げて、挨拶といたします。

創立一二五周年 記念事業盛大に!!

★第五回津高同窓会美術展★

同窓会美術展を終えて

実行委員長 鈴木一生(昭和26年卒)

今回の美術展は、天候にも恵まれ入場者も多数にのぼり好評盛會裡に終えることが出来ました。津高校の歴史と伝統をいかみ、記念展のもつ意義と誇りを改めて感じました。教育現場の環境が変わっても、たしかな母校愛のもと豊かな文化の嚆矢を次世代へと引き継いでいってほしいと思います。

出品者、実行委員、関係者の皆様の

期 間 平成十七年七月二十七日
～三十一日
場 所 三重県総合文化センター
第1・第2ギャラリー
出品料 三、〇〇〇円

出品数 絵画七〇点(在校生三二点)

彫塑立体造形三點、デザイン工芸二〇点、写真二二点、書道五二点(在校生二〇点)

期間中会場記帳者 一、三〇六名

初日は会長、校長、委員長、五部門出品者代表者のテープカット

記念品 作品をCDに収録配布

経費節約 案内状は月輪清先生制作

掲示板 桜井章治氏自筆

出品目録 A3二ツ折りに縮小 プラ

イバシー保護のため、今回は卒業年、

作品名、氏名、居住地(県・市町村名のみ)

会計監査 飯田道嗣(昭和28年卒)、



辻通隆氏(昭和26年卒)、八月十一日実行委員十五名のうち十二名の出席



席のもと承認を得る。

同窓会報第四十二号で記念展開催をお知らせして約一年かけ、プロアマ問わずの格調高い作品展になりました。その間何かと協力ご支援頂いた、同窓生諸兄姉に改めてお礼申し上げ、同窓会、学校の益々の発展を祈念申し上げます。報告とさせていただきます。

★ 第四回ゴルフコンペ ★

平成十七年五月十五日(日)
富士エクセレント倶楽部伊勢大鷲ゴルフ場

ゴルフコンペに参加して

中島 順 二(昭和46年卒)

一二年とは長いですね。さすが我等が母校。創立は一八八〇年、明治十三年です。今上天皇陛下は、二二五代目ですが、これは余り関係は有りません。歴代天皇名を暗記させられた先輩方は、大変でした。二四は多いですね。

先輩と言え、この間すごい人を発見いたしました。「甘粕正彦」明治三十八年津中学卒業です。歴史の

教科書に出てくる様な人が、先輩にいたなんて誰も教えてくれませんでした。少し不思議。

それはさておき、ゴルフゴルフ。昭和四十六年卒業の私共は、昨年同窓会総会の主幹事を無事に済ませましたので、今回のコンペに七名で参加いたしました。総勢一三〇名を越える盛大なコンペで、スコアはともかく楽しい一日を過ごさせて頂きました。人類が考案し

た最も面白いゲームの一つですから、これも当然ですね。日曜開催は今回が初めてかと思いますが、やはり日曜日が参加しやすいですね。少し気になりましたのが、私共より年下はわずかに数人という、平均年齢の高さでしょうか。幹事も済ませたので一人前かと思いましたが、何のまだまだハナタレ小僧、副幹事ではオムツも取れない状態ですね。でもこれも二五年の歴史の賜と、前向きに解釈しまして、先輩方の元気の良さを喜び、若い衆の参加もつながり、次回の開催へつなげていって頂きたいと思えます。末輩になりましたが、幹事の皆さんお疲れ様でした。楽しいコンペ有り難うございました。心よりお礼申し上げます。

★ 同窓会員名簿の発刊と販売について ★

すでにご承知のとおり、母校創立二五周年記念事業の一つとして、平成十七年三月、津高同窓会名簿を発刊しました。現在、残部があり、販売していますので、ご購入希望の方は事務局へご連絡下さい。

価格 一冊五、〇〇〇円

(送料六〇〇円)

【注意】

同窓会とは正式な委託契約のない業者が勝手に類似の『名簿発行』を企画し、会員の皆様はハガキ、電話等による案内や販売を行うことがあります。

【問い合わせ先】

津高同窓会事務局

〒514-0001 津市新町三丁目一

TEL・FAX

(〇五九) 二二九七三三二

★ 麗しき世界遺産—東欧9日間の旅— ★

荷馬車がカッポして

倉田 正大 (昭和17年卒)

ブルガリアといえば、ヨーグルトが世間の相場、それがなんと今や押しも押されぬ勢いの開拓、琴欧州へと変身、日本の国技が泣くぞ、日本男児も頑張れとハッパをかけたくなる。

そのブルガリアの首都ソフィアへ八月二十三日の深夜に到着、ホテルヒルトンソフィアの三連泊から、ウエリコ、タルノウォオの一泊、ルーマニアの古都ブラショフの連泊、首都アカレストの一泊と世界遺産めぐりの旅が始まる。

まず国境の町ルセにて、かの有名な美しく碧きドナウ河を眼下に昼食をとる。そしてここで、ルーマニアの観光バスに乗り換え、国境のドナウ河を越え、ドナウ平原をドライブ、一路聖の古都ブラショフへとスピードをあげる。途中ルーマニアでは大事な交通手段である荷馬車が牧草を積んで、家族共々家路を急ぐ光景は、長閑そのもの。だが、その荷馬車を縫うようにして観光バスが対向車に注意しつつ、追い越すをかけるのには、いささか危険を感じる。それ



共に生きるために

川原 啓 美 (昭和20④年卒)



今年は戦後六十年であるが、それはまた私にとっても津中学校卒業後六十年間が経過したことを意味する。激しい空襲と食糧不足の日々であったが、少年時代の懐かしい思い出の幾つかも胸をよぎる。

さて私は、その後旧制高校を経て大学の医学部に進んだ。卒業する前から私の心には、将来アジアの発展途上国に対する医療援助をライフワークにしようという考えがあった。その当時世界の多くの人びとから尊敬されていたシュバイツァー博士へのあこがれもあったが、直接的には数年前の医師が戦後アジアの戦場から復員して来て「われわれ日本人はアジアの国に対して責任がある。自分は軍医として現地に赴いたが、今度は平和の使徒として遣わされたい」と語った言葉に強く影響された。

実際は、胸部外科医として一人前になるためかなりの年月をついやし、その中で米留学も経験したが、一九七六年、前述の先輩や、日野原重明先生

たちが中心になって始めていた団体(日本キリスト教海外医療協力会)から、短期協力医としてネパール王国へ派遣されて、アジアとの関わりが始まった。

場所は中部ネパールの丘陵地帯で、タンセンという小都市の郊外であった。外国の支援によって建てられた百ベッドの小病院であったが、毎日明け方から押し寄せる患者たちの治療に忙殺された。特に唯一一人の外科医であったためすべての手術を行わねばならず、目の回るような毎日であった。しかしその中で次第に気がついて来たことは、患者の状態が日本と非常にちがうことである。病院まで数日間、中には一週間も歩いて、または担がれて来る人たちがあつた。また貧しさにかまけて来



院を後のばしにするため、診察した時はどうしようもない手おくれということも少なくなかった。

その中で私が見たのは、村々を巡回する地域保健グループの働きであった。彼らは村の人びと、特に母親たちにどうやって子どもを栄養失調や感染病から守るのかを、優しく丁寧に教えていた。私はネパールのような国で最も必要とされている働きがここにあるな、と思った。

三ヶ月の協力活動を終えて帰国した時、私は大いに迷った。本当は正式に三年間、あらためて派遣されることになっていた。外科に対する大きなニーズがあることは分かった。また、家族のために死ぬまで働く、と言って下肢切断手術を拒んだ母親や、お手伝いによって得た少しの食物を、幼い弟妹たちに分け与えるためむじみ腹をかかえて家に急ぐ姉の姿など、私たち日本人が忘れてしまった家族愛の姿を見て、私はネパールで働きたかった。しかしそれが最善だろうか。

実際ネパールで病院に来ることのできる人は全国民のわずか二十パーセント。その病院へ来られる人を受け付けて私が手術するのは、地域のなかでのピンポイントの働きにすぎない。

迷っていた時、大きなニュースが届いた。一九七八年、WHO(世界保健機関)が当時ソビエト領のカザフスタンの都市であったアルマ・アタで出した宣言である。内容は、これからの世

界の人びとの健康を増進するための、思い切った戦略の変更であった。つまり従来は都会中心の医療医学であったが、地方、特に僻地にすむ人びとの強い参加を得て、予防医学や地域保健を重点とする、ということであった。これが私に大変大きなガイドラインとなった。一九八〇年、私はアジア諸

北斗七星を語る

橋 本

晃 (昭和23年卒)



松阪市笠松町に、北斗社という神社があります。その境内の一隅には、北斗七星社を陰刻した自然石があり、天空に輝く星と同じような配列がなされています。

この自然石は昭和五十年頃までは、村内各地に散在しておりました。十月中旬の夜空に見えるこの星座がまるで地上に投影されたことと配置されていたのです。しかし現在は、耕地整理のために一ヶ所に集められております。

今回私が皆さんにお話しする事はこの星座は、私たちに色々な事を教えてくれているということです。

第一点は、北斗七星の移動する角度

国の草の根医療保健の発展のために働く中堅のワーカーを招き、短期研修をする活動を始めた。資金は日本国内に住む有志の方がたによって賄われ、今年で五百名を超す人が研修を受け、アジア各国に帰って働いている。

(医療法人財団愛泉会理事長
アジア保健研修財団理事長)

です。北斗七星は四・三の星といつて、斗の部分が四つ、柄杓の部分が三つの星から成り立っております。そして、それぞれの星には、名前が付けられています。(図1参照) この星は、二時で六十七度の角度を移動し、その角度は内宮の東宝殿と西宝殿とのなす角度と同じであるといわれているのです。



第二点は、この星の柄杓の先端部になる「破軍星」が、江戸時代に軍の占いに用いられていたということです。

『三雲庶民史』に掲載されている呪文は、敵に対して如何なる方向を邁んで攻撃すれば、勝利に導くことができるかを教えてくれているのです。

「長く龍は四時去つて月と数を覚ゆべし」

この呪文では北斗七星を「長く龍」と記し、次に説明する数え方で星座の「破軍星」が指し示す方向を算定し、その方向から敵を攻撃せよと説いているのです。

例えば、六月の昼の十二時(午の時)に敵に対して攻撃をするを仮定します。表2を参照してください。昼十二時即ち「午」を基点とします。呪文のとおりに「午・未・申・酉」と四つをやりすごし、更に月の数だけ進みます。即ち「戌・亥・子・丑・寅・卯」となるのです。「卯」は東の方角をさします。

「敵に対して東の方角に攻めるよう陣をはれ。」としているのです。この方法で算定された方向は、北斗七星の柄杓が指し示す方向と一致しているのです。



私もこの呪文に基づいて算定し、年間を通して観察した結果、算定した方向と星座の向きはぴったりと一致しました。その一覽表を掲載しようと思いましたが、紙面の都合上省略することにします。代わりに例題を出題します。

【問題】

明け方寅の刻、しかも十二月初旬、敵を攻撃するにはどの方位からかかれ、勝利を得ることができようか。

興味のある方は解答をお寄せ下さい。

第三点は、この星の特徴として、天気を予測することができるといわれています。

一、魁星がきらきら輝き、

周りの星もきらめく時……晴天

一、北斗の前に黄色の雲あれば

一年間だけの津中生

山村 嘉 己 (昭和22年卒)



「津中は無理でしょうね。」と、冷たい一声がぼくの耳を通りすぎました。松阪第一国民学校六年の自分でもできる子だと思っていた小学校時代のぼくです。この声はその夢を砕く厳しい一声でした。津中はぼくの希望だったのです。それだけでなく、三重県の子供たちの夢でもあったのです。ぼくはその入学の夢をみごとに断られたのです。

ところが、父の急な転任によりぼく

……翌日は風が吹く

一、北斗の前が潤えば

……その夜大雨

一、青黒色の雲あれば……大雨

一、黒色の雲あれば……風強し

一、黄白色の雲あれば……明日暑い

一、白雲北斗の柄をさえぎれば

……三日以内大雨

まだまだ色々な事を私達に教えてくれておりますが、今日はこの辺で筆を止めさせていただきます。

(松阪市三雲文化協会会長)

はその年、大阪の八尾中(府立三中)に入学しました。四年間の中学校生活はあの太平洋戦争の深まる厳しい戦時中の長い時間でした。軍国少年の権化だったぼくは「八月二十日入校セヨ」の陸軍航空士官学校の合格通知書の前に、同じ月の十五日、さめざめと涙を流していました。偽りのないぼくの姿です。

しかし、旧制中学のふしぎな制度によって、四年制で八高(現名古屋大学)を受験したぼくは見事に失敗しました。その後また父の都合で三重県にもどることになったぼくは五年生をどこかで過ごさなければならなくなりました。もちろんぼくの眼前には津中の姿しかありません。「ままだ。」と眼をつぶる

気持ちで津中の編入試験を選びました。

夢のような合格でした。ぼくは中学生五年目にして憧れの津中に合格したのです。それも在学を許されたのは、

たったの一年間。だから、それだけに、

この一年間のすばらしかったこと、も

との津中の校舎は焼けて、久居の旧兵

舎を借りたみすばらしいものだったし、

多くのものは兵隊の古服や粗末な学生

服に身を包んでいただけで、そして食

べる弁当は哀れなものであったけれど、

この一年間のぼくのなかには今も青春

がいっぱいつまっています。勉強も面白

かったし、何よりも先生がすばらし

かった。こんな楽しい学校生活ならば

一生続けたいと思っていました。

ぼくが今、曲がりなりにもフランス

文学者として余生を送っているのはこ

のような真話があるのです。楽しい勉

強の結果、その年ぼくは京都の三高の

文科丙類(フランス語クラス)に入学、

その後京大のフランス文学科へと進み

ました。四十年ほど関大を中心に近畿

の学生諸君を何万人と教えました。そ

して今でも多くの卒業生諸君と盃をく

みかわしています。

皆さん、津中がぼくに教えてくれた

のは、何よりもこの学校というものの

すばらしさ、そして教育というものの

楽しさです。抜きん出た伝統を持つ津

中の、いや津高の卒業生であることに

絶対の誇りを持ちましょう！

そして蛇足を付け加えれば、良い先

生の思い出を持つことは欠かせません。

ぼくのなかには、講義中に「敢えて」

を使うことで、「アエテ」のアダ名を

持たれた、その歴史への情熱でぼくら

九十八歳 日日これ好日

加藤(岡) 文 (大正13年卒)



ました。四十年ほど関大を中心に近畿の学生諸君を何万人と教えました。そして今でも多くの卒業生諸君と盃をくみかわしています。

(関西大学名誉教授)

皆さん、津中がぼくに教えてくれた

のは、何よりもこの学校というものの

すばらしさ、そして教育というものの

楽しさです。抜きん出た伝統を持つ津

中の、いや津高の卒業生であることに

絶対の誇りを持ちましょう！

そして蛇足を付け加えれば、良い先

生の思い出を持つことは欠かせません。

ぼくのなかには、講義中に「敢えて」

を使うことで、「アエテ」のアダ名を

持たれた、その歴史への情熱でぼくら

を圧倒され、九十歳を越えた今なお研

究への情熱を保たれている歴史の野田

先生と、静かにぼくの胸に「信じる道

を行け」と囁き、同業の道へと導かれ

た英語の野間先生のお姿が際だって残

っています。

(関西大学名誉教授)

皆さん、津中がぼくに教えてくれた

のは、何よりもこの学校というものの

すばらしさ、そして教育というものの

楽しさです。抜きん出た伝統を持つ津

中の、いや津高の卒業生であることに

絶対の誇りを持ちましょう！

そして蛇足を付け加えれば、良い先

生の思い出を持つことは欠かせません。

ぼくのなかには、講義中に「敢えて」

を使うことで、「アエテ」のアダ名を

持たれた、その歴史への情熱でぼくら

を圧倒され、九十歳を越えた今なお研

究への情熱を保たれている歴史の野田

先生と、静かにぼくの胸に「信じる道

を行け」と囁き、同業の道へと導かれ

た英語の野間先生のお姿が際だって残

っています。

卒業後八十余年、私は九十八才になりました。

今年は八月に入って連日三十度をこす猛暑にみまわれて雨らしい雨はみえず、ただ前の庭の百日紅だけが暑さをものともせず紅々とゆれていきます。

私は、毎日テレビでプロ野球や高校野球を楽しみに見ております。ニュースも好きですが、交通事故や恐ろしい事件があまりに多くてこわくて見ておれません。

そんな毎日の中、六月のはじめ頃、孫娘(津高・昭和50年卒)から電話があった、「おばあ様、歌舞伎の切符が手に入ったから一緒にしましょう。日は七月二十二日です」とのこと。七月と言えは暑い最中でしょうし、第一、九十八才の寿命があるかしら等、不安が一杯ありました。それから歌舞伎のパンフレットを送ってもらい、会場は鈴鹿市民会館で出し物は「吉野山」であることを知りました。当日、それはそれは暑い日でした。約束通り、二時半に自動車を迎えに来てもらい、娘(津高・昭和21年卒)と一緒に出かけました。三時半の開場一番乗りで入場しました。会場は冷房が程よくきいていて快適でした。正面には鈴鹿市の鹿がはねているりっぱな緞帳があり、目を見張りました。私は、会場の中程のよく見えてよく聞ける場所で車椅子にかけたままで見ました。懐かしい「義経千本桜」はいっつも華やかな舞台です。魁春の静御前の華やかな踊り、それにも増して吉右衛門の佐藤忠信(実は源九郎狐)の踊りは静御前をよくリードしながら、見事な踊りぶりでした。世話物は、両耳に補聴器をつけていてもセリフが半分しか聞き取れず、少し残念でした。

誓子句碑の前で

大久保(宮本)和子(昭和20年入)



九十八才になりました。このように母娘三代でお芝居を楽しく鑑賞することができまして、幸せなことだと思います。

私は、太平洋戦争末期の昭和二十一年四月に県立津高女に入學しました。すでに運動場は耕されて畑となり、入學式翌日の上級生との対面式も生徒動員されている三重工業の広場でありました。また物資欠乏の折柄、憧れの三重校の校章も無く、代用品の白布に黒糸で刺繍する手作りの校章づくりが初日の授業でした。制服も袴も九歳上の姉のお古、とりわけ背の低かった私が、姉の使った三重校の袴を肩から下げると、全く袴が歩いている様で垂水から学校までの途中で悪童どもに「チビ、チビ。兄さんの袴」とからかわれましたが、それでも母や姉の通った学校に通学できる喜びに胸を張っていました。しかし戦局は益々悪化の一途を辿り、

七月二十四日の爆弾、二十八日の焼夷弾により、津の街は焼野が原となっていました。幸い学校も私の家も辛うじて被災を免れましたが、同級生二人の犠牲をはじめ、多くの友人が家族や家を失ったのでした。そして終戦。平和になったものの、我が家はそれからが大変でした。軍人だった父がやがて帰郷し、帰農することになるのですが、公職追放された父や私達一家を故郷の人々が温かく受け入れて下さったことには今も感謝しています。

授業では文法が一番好きでした。まだその頃は旧かな遣いでしたので、後に俳句を学ぶようになって、そのことが非常に役立ちました。また当時教習実習生だった国学院大生の鈴木茂先生の講義を受けたことも、今は懐かしい思い出の一つです。

男女共学、学区制により、高一は久居の校舎へ通い高二からは柳山の東校舎へ通うことになり、図書部に入りました。といっても籍を置いていただけで、あまりに仕事はしない部員でしたけれど、あの微と書物の匂いのする図書室独特の雰囲気がとても好きでした。近年三ツ村先生を開んでの図書部のOB会も開かれ、平成十年からは二十六年卒を母体とした「三傘会」と「万葉の会」も結成され、私は「万葉の会」に入れて頂いて月一回三ツ村先生の講

高齢者同人誌「群獣」

北川 健(昭和26年卒)



「三重県津中学」と呼ばれる頃から先輩の中で、著名とされる文人に、中谷孝雄、寺崎 浩、長谷川素近、駒田信二、森田 功らがいて、その輪を

義を受けるようになりました。年を経る毎に講義も万葉から奥の細道、更級日記へと進み、毎月一回の講義は同級会のもつで、待ち遠しくなりました。去る五月九日、伊勢市おかげ横丁の山口誓子館主催の句碑巡り吟行会で、母校を訪ねる機会がありました。私にとっては津高百年祭の時以来、二十数年振りの母校でした。正門近くに立つ誓子句碑へ若き日のけふを荒波にも泳ぐを見学し、期せずして、校歌を歌おうということになり、奥燕俳句会会長石井いさお先生(昭和34年卒)と山口誓子館々長橋爪貴子さん(昭和39年卒)と私の三人で校歌を歌いました。折からの薫風に乗って、中庭の橘の花がはらはらと舞い散り、恰も天国からのメッセージのようでした。

恩師に広げると中山義秀(芥川賞作家)がいる。その津中学の校章は六稜を形作っていた。それに由来する津中文芸部雑誌に「六稜」というのがある。

昭和二十四年三月に「六稜改」「青桐」第五号を、津高等学校文芸部の名で共学創刊号として発刊した。青桐という木は場違いにも久居の兵舎跡に、男女共学の蜜月のころ繁茂していた希望のみどりであった。続いて第六号を

移転記念特集号として、翌年には第七号と別冊青桐・詩歌特集号を相次いで刊行した。昭和二十三年に赴任して来られた川口常孝先生は国語と詩歌鑑賞を受け持たれ、教壇に上がると「気障っぽく」「詩は待つことである(リルケ)」と黒板に書いて貴公子然とした青き血の面を静かに生徒に向けられた。文芸部の「青桐」も率いられ、自らも萬葉評論の一環として「飛鳥浄御原宮」の大論文で誌上に登場された。

部内での先生は特に細かい指導はされず、新刊の合評会で喧々々の議論百出の中でも、ニコニコ微笑んでおられるだけであつた。このことは後年に終生の師とすることになる「まひる野」の窪田空穂の「みんな自分のやり方でやればいいんだよ」との持論と、この時すでに軌を一にされていたのかも知れない。「若き獣の群れ、集え群獣」と我々に鞭を飛ばされた。このことは「まひる野」の一九九二年十二月号に詠まれ、【敗戦後の方向定まり難くありし時、獣の群れ、集え群獣】とある。結婚後、間なしの住居である谷川神社の一隅に、大勢で押しかけでは、食糧事情のよくない時節に厚かましくも度々御馳走になった。偶々、その群獣の集いが先生宅で持たれていた最中に、かしましき議論を凌ぐ落雷の響きと共に境内の老松が直撃を受けた。勿論、群獣の面々は雷神以外のよるすの神々のご加護のもと何の差し障りもなかった。

昭和二十六年三月、最後の群獣たちが卒業し、程なく先生も上京された。その後、群獣たちは「文学以外のところ」をそれぞれに彷徨っていたが、先生は帝京大学で上代文学を講じられていた。それでも時折、先生を中心に家族会などとして付かず離れずの関係は保たれていた。先生は晩年、「車椅子の生活を余儀なくされる。一方、歌人としては窪田空穂・章一郎主宰「まひる野」の筆頭歌人を勤められていた。

ある時夫人から「よく二人で温泉旅行にでかけるけれど、私が女だから大浴場に連れて入れない」とのこと、湯河原に男三人がお供した。それまでも「まひる野」に群獣のこともをお詠み戴いたことはあったがその後、「湯河原に集う」が三号に亘って、【素っ裸のわれを支えて素っ裸の教え子三人湯に入れくる】などと詠われ、更に「歌びと川口常孝が刻んだ魂の絶唱」となる最後の歌集「命の風」に群獣一八首が収録される栄に浴した。

定年以後、時間を余しつつあった群獣たちは、先生が亡くなれて一年を経っていたが、「青桐」に継ぐ同人誌の発行を「群獣」の名で蘇らせることにした。先生のご参加が適わなかったことは、誠に残念であったが、代わって三子夫人が健筆を振るって貰われる。「古希を過ぎて間もない若者」による同人誌という、もの珍しさもあって、今のところ各種新聞に大きく取り上げられ、「読ませる力が溢れている」等

と好評である。
年金と一部有志の寄金により、間もなく四号が刊行される。
参考文献

友情&夢

米虫(藤田)和子(昭和39年卒)



津高を卒業して四十年余り、猛暑の今夏、プライベート面では大勢の友との懐かしい出会いがあり嬉しい年でした。同期生それぞれが節目となる年を迎える前哨戦のように、大阪の同期生仲間が勝浦へのバス旅行を計画し、世界遺産の熊野古道散策や那智大社参拝と私にとっては初めてづくしの旅がありました。その一週間後、東京の同朋会で川端康成の伊豆の踊り子縁の宿「福田家旅館」への旅が計画されました。この地も初めての旅。旧天城トンネルへも足を運び、石造りのしつとりと濡れた壁、ひんやりとした空気に非日常を感じたものでした。

例えば、大学入学とともに故郷へ戻る事なく、現在に至るまで大阪で暮らしています。私の大学時代は、今では考えられないような女子大生「国論が

『津ゆかりの作家作品集』岡正基著・津高百年史・「群獣」創刊号
(四谷皮膚科クリニック院長)

流行り大学院進学も少ない頃でしたが、幸いなことに平穏な学生生活を送ることができました。

四回生の終わりの頃、あるTV局の生番組で京大の会田雄次先生と女子大生との討論会があり、先生の持論(「国論」をテーマにディスカッションする機会がありました。

入院中の祖父が病室のTVでその番組を観て喜び、お見舞いを兼ねた祖父孝行になりました。私から祖父への最後のプレゼントとなり、忘れられない思い出です。

サークル活動と実験に明け暮れた生活でしたが、たくさんの良い友達でできた有意義な時代です。その当時、教養部には万葉集の大飼孝先生がおられ、岩波文庫の万葉集を中心に明々と歌う講義には深く感銘を受けたものです。すべてのものが新鮮に映る音楽や思想や科学など多方面に興味を持つことができました。大学時代のサークル仲間とは現在も隔月に一回飲み会と称して会合を持ち情報交換や友情を暖め合い、わいわいガヤガヤと有意義に過

ごしています。気を遣うこともなく本音で言葉を発する事ができ「素」の自分になれる癒しのリフレッシュタイムになります。友達は大切な宝物です。私には夢があります。その中で実現できたのは宇宙人(?)が描いたと言われているナスカの地上絵を観ること。アクロバット飛行のセスナ機に乗って思いっきり楽しめました。素晴らしい飛行でサービスしてくれたパイロットには感謝の意味を込めてチップの大判振る舞い、興奮し大感激でした。

絵が書かれたであろう古に思いを馳せて——どのようにしてこの地を巡んで広いキャンパスに幾何学的な巨大な絵を描くことができたのかしら。今年には新たに第十番目の惑星も発見されたことですから、宇宙人もいたのかも知れませんね。

もう一つは、ヨーロッパの最北端北極圏にあるノールドカップ北岬で落ちない太陽(白夜)を眺めること。ベルゲンから二十人乗りの軽飛行機とバスを乗り継いでようやくたどり着いた北の果て。嬉しさの余り「来た——」と叫んだものでした。

カール・セーガン著「Pale Blue Dot」を読んで、さらなる宇宙への興味は深まるばかり、はるかかなたの宇宙からこの淡いブルーの美しい地球を一度でいいから眺めてみたいと思っています。この実現しそうな夢を今日も夢みしています。この夢実現するのでしょうか？

「井真成」の墓誌の「こと」など

稲畑 耕一郎(昭和41年卒)



「自然の叡智」をテーマとして、半年にわたって繰り広げられた一大祭典「愛・地球博」も、秋の到来とともに終りを告げた。

準備段階では、開催の是非をめぐって、甲論乙駁があったものの、始まってみれば、入場者数も目標を大きく上回り、世の関心の高さは想像以上であった。これにいささか関わった者の一人として安堵の思いでいる。

今回、私が関わったのは、長久手会場のセンターゾーンに位置したグロバルハウスの中国文物の展示である。

このパビリオンは万博協会が展覧するシンボル館であり、数十億年の地球の歴史と人類の歩みを各国から持ち寄った自慢の品で示そうというものであった。古いものでは、アフリカ諸国が提供した最古の人類の化石「ルーシー」や七万五千年以上前の最古のアクセサリー「貝殻ピアス」、新しいものでは、欧米諸国からのニュートンの望遠鏡や深宇宙探査機ボイジャーなどがあった。シベリアの永久凍土から掘り出された

ユカギルマンモスもここに置かれた。その中に伍して、中国文明を数点のもので示してほしい、それも日本で初公開のものでという要望が万博協会から寄せられた。中国の出土遺物の展示は、近年途切れることなく開催されており、私も幾度もその手伝いをしてきているが、それだけにこの二つを同時に実現することは至難のことと感じられた。それも、開幕まで一年を切った時期であった。

そこで、何とか考えたのは、中国文明ならではのものと、その文明も交流の中に生まれたものであることを示すものを選ぶことであった。

前者は、長く文明の核であり続ける文字、すなわち漢字に関するもので、これには殷墟の刻字卜骨と銘文をもつ周代の青銅の鼎をあてた。鑄造青銅器の器壁の内側に陰文の文字を鑄込む技術は今もって解明できないでいるからである。

後者は、西安で発見された唐代の金銀器と馬に乗ってポロに興ずる姿を描いた長大な壁画である。金銀器の細工は西方伝来のもので、一つのカップには琵琶や箏などの西域の楽器を抱えた楽人が配され、把手には胡人の顔のレリーフがある。ポロもペルシャ起源といわれるスポーツであるが、唐代に

は貴族の間でたいへん人気があった。この壁画の大きさと絵画としての芸術性も見てほしかった。また、文字通り中国を代表する陶磁器チャイナも国宝級のもを三点用意したが、その染付けの原料であるコバルトも西の世界との邂逅なくしては手に入らなかったものである。

しかし、これらにも増して話題を集めたのが、いわゆる遺唐留学生「井真成」の墓誌であった。そこには、この「日本」からの人物が「尚衣奉御」という官を追贈されたことが記されている。この墓誌が日中関係史の文脈の中で取り上げられることが多かったのは、さもありなんとは思ふものの、当初の意図はそうではなかった。

すなわち、万博という世界の人々が集つたところで、八世紀の初め、世界最大の都市であった唐の都長安には、日本に限らず、近隣の高句麗、新羅、百済はもとより、ユーラシア全域からこの地にやって来ており、出自を問わず、いかなる人間でも、努力さえすれば、役人になることも、武将になることも、商売をすることもできた。そうした開かれた社会のシステムを持っていた事実を、小さな石を通して、今一度、内外の人に思い起こしてほしかったのである。

そういうシステムが保障された社会こそが、実は繁栄をもたらす最大の要因である。偏狭な自大主義、排他主義は、一時の安寧をもたらしても、決し

て社会の発展には寄与しない。民間のグローバル企業といわれる組織は、すでにそうなっている。国の垣根はいつ越えられるのだろうか。いや、実はそれに縛られなかった時代のほうが長いのである。近現代は窮屈である。

私には中国の古いことを専門とするものであって、現代のことにはまったく疎い。それでも、このような祝祭の場を通してでも、人々の意識の変革につながるようなことができないかと考えている。まことに迂遠なことであるが、(早稲田大学教授、北京大学客員教授、在北京)

通俗常識の「法と経済学」

福井 秀夫(昭和52年卒)



これらに対する標準的な法と経済学による評価は、すべて「不可」です。

法と経済学は、法解釈や判決のもらす経済社会への影響を分析する学問です。日本の法学で前提とされる「正義」の追求が論者や裁判官の世界観に依存するのに対して、社会の豊かさの増減を測る基準を持つことが特色です。日本では数年前に「法と経済学会」(http://keio.jp)が設立され、やっと

「借家人の居住権を守るための家賃統制は意味がある」、「希少動物の絶滅を防ぐには動物に私的所有権を認めず公的に管理すべきだ」、「地球環境を守るため省エネやリサイクルを法令で義務付けるべきだ」、「シートベルト着用義務によって交通事故被害は減少した」、「医師や弁護士などの資格者の質向上のために試験を難関にすべきだ」、「国立大学、県立高校や公立小中学校では国民の教育を受ける権利を守るため低廉な授業料を維持すべきだ」一等等の主張に共鳴される方も多いのではないのでしょうか。私が現在携わっているのが「法と経済学」の研究とそれに基づく政策立案。天邪鬼で恐縮ですが、

例えば、一九四一年の借家法による家賃規制や解約制限は自発的な退去が見込めないファミリー層向け借家の供

給を極端に少なくし、かえって住宅難を激化させました。私も議員立法に関わった定期借家が二〇〇〇年に創設されて借家供給が増え家賃も下がってきています。希少動物の乱獲を防ぐには私的所有権を認めて所有者に保護の責任を持たせるのが効果的であることは世界中で確認されつつある事実です。地球環境を守るためにやみくもにリサイクルを進めてもかえって資源の浪費と環境悪化を招きかねません。むしろ環境税を課して、後は消費者の私利利得動機に委ねた方が効果的です。シートベルト義務付けは、事故による傷害を小さくしますが、運転者の注意義務を弛緩させて事故発生を増やすため、事故被害の総量(傷害の程度×事故件数)は義務付け前と変わらないというのが実証データです。司法試験の合格者を絞っても、しよせん試験で判明する知識しかチェックできません。弁護士が抑制され競争が緩和される分、実務家としての質は低下します。

生徒一人当たり公的資金投入は、津高などの官立高校が年間82・9万円と、私立高校の28・3万円と比べて極端な格差があります。大学にいたっては国立106・4万円、私立15・6万円と7倍の開きです。生徒から見ると不公平はもろいですが、教育の質において官立が私学の何倍もの値打ちがあるはずありません。公費の投資効率の面で官立学校が著しく劣っているのは、競争条件の格差がかえって学校や教員の

創意の発露を阻んでいるからといえます。内閣府規制改革・民間開放推進会議では私も参画し、官私立を問わず生徒一人当たり一定額の補助金を交付する教育パウチャー(切符)の導入を提言しています。実現すれば官民対等に競つことで、より生徒本位の教育がまねく進展するでしょう。以上の議論に興味がある方には、S・ランズバーク『ランチタイムの経済学』日経、福井秀夫『官の詭弁学』日経、同『司法政策の法と経済学』(近刊)公共政策研究所をお勧めします。

在学当時の無秩序放任の津高風土は普通の意味での生徒本位とはいきかね

音楽の都・ウィーン

松岡 由季 (平成6年卒)



津高での一番の思い出は、プラスバンド部に入って夏も冬もクラリネットを練習していた日々です。夏の暑いなか、気温が四〇度にもなるのではないかと思われた旧図書館で、夏のコンクールに向けて練習したこと、津球場での野球の応援、寒い冬に屋外コートを着て凍えながら練習していた

ましたが、私にとっては福沢諭吉の独立自尊、丸山真男の「する論理」との遭遇に至る揺籃器のような環境だったのかもしれない。法学や経済学に入材の乏しい日本では、実は両者は公正で透徹した眼を持つ傑出した法と経済学者でもありました。官僚から研究者に転じた私としては、官尊民卑法令のもとたず市民利益の毀損を法と経済学に基づく立法の形で修復していくことによって、母校や官庁で得たアドバンテッジに報いていきたいと考えています。

(政策研究大学院大学教授・知財プログラムディレクター)

ことを思い出します。高校卒業後は、クラリネットに触ったこともありましたが、その七年後に音楽の都ウィーンで、オーケストラのクラリネット奏者と友達になるきっかけをつくってくれたのは、このプラスバンドでの体験でした。ウィーンでは毎日コンサートやオペラが催されており、数万円の高い座席から数百円の立見席までお財布事情にあわせて音楽が楽しめます。ニューイヤークンサートで有名な楽友協会の黄金ホールでコンサートを聴いていた時、休憩ごとに目の前を通るプロの楽団員

を物珍しげに眺めていたところ、オーケストラのクラリネット奏者の方に声をかけていただきました。わたしが座っていたステージ上の奥の座席は、打楽器の隣で音響が悪いのですが、指揮者の顔も見ることができて、オーケストラの一員になった気分が味わえるお得な座席です。この時の出会いがきっかけで、三年間のオーストリア滞在中に、ウィーン音楽セミナーの事務局でお手伝いをさせていただき、すばらしい演奏をされる先生や将来の音楽家たちに会つこともできました。

オーストリアでは、欧州平和大学という田舎の大学に通い、平和学の修士をとりました。津高卒業後、北海道大学に進学、社会に出て仕事も経験しましたが、体系的に学んでみたいと思っていた平和学を勉強する機会を得ました。

わたしにとって最初の著書となった『観光コースでないウィーン』(高文研より二〇〇四年出版)は、オーストリアでの三年間の研究滞在中に、ウィーン市街に残る歴史の現場を訪ね、現代に生きるオーストリア人の心境を描いたものです。ワルツの都ウィーン。ハプスブルグ帝国時代の宮廷文化と音楽のイメージで、世界中のファンをひきつけてやまないウィーンですが、おきまりの観光コースを一步はなれると、華やかさの裏にある閉ざされた時代のオーストリアの苦難を知ることになります。そこ

は、かつてヒトラーに熱狂した舞台でもありました。第二次世界大戦の時代に、当時ウィーンの人口の一〇%をしめたユダヤ人の多くがホロコーストの犠牲になったことは知られていません。本の中では、映画「サウンド・オブ・ミュージック」に隠された歴史背景にも触れています。「サウンド・オブ・ミュージック」で描かれたオーストリアは、ナチス・ドイツに侵略された被害者としてのオーストリアでした。しかし現実には、インフレと失業の嵐の中で、ナチス・ドイツとの合併を熱狂的に支持していた人々が多かったことも事実でした。

後半では、留学したオーストリアの欧州平和大学での体験も含まれています。紛争の絶えないアフリカや中東、南アメリカからの学生たちと一緒の寮生活で学んだ平和学について、また地元の小・中学校へ出向き、子供たちや先生にインタビューした体験なども綴りました。

歴史の記憶と国のアイデンティティを探る一冊として、多くの方に読んでいただければ幸いです。

(成蹊大学大学院特別研究員)
HP: <http://manbow.ciao.jp>
メール: maishok@v.soken.ac.jp



副会長就任ごあいさつ



古市 恒夫

(昭和29年卒)

昭和二十九年三月、優秀な成績で卒業された多くの友人と一緒に、辛うじて卒業いたしました。

前の年の夏は野球部が甲子園出場を果たしております。現在の出場は一県一校ですが、当時は隣の岐阜県の代表とも戦ったものです(三岐大会といいました)。

その試合ですが、運よく開会式当日の第三試合になりました。前の晩十一時ごろ三重会館からバスで出発。あの開会式の雰囲気を感じられたことはラッキーでした。残念ながら2対1で惜敗。

さて肝心の津高での三年間ですが、よく勉強した記憶は全く、ございません。嫌いな科目のテストはいつも名前だけ書いて白紙で提出、「だるまさん」の絵を書いて「手も足も出ません」と書きましたら、成績はもちろん態度が悪いということで当然ながら「単位」をもらつたことはあり得ません。今から思えばよく卒業できたものだと思います。親が津高へいく機会はあまりございませんが、おかげさまで毎年三月は必ず

お話をいただきました。昨年末、定年を迎え、毎日が「全日空」です。全部、日が空いております。時間は充分ございますので、これからは津高同窓会の為に少しでもお役に立つよう頑張る所存でおりますのでよろしく(支援の程お願いいたします)。



副会長就任ごあいさつ



田川 敏夫

(昭和32年卒)

本年度から同窓会副会長を仰せつかりました。微力ですが会発展のために全力を尽くしたいと思っていますので、よろしく願います。

さて、私が入学した昭和二十九年には、まだ体育館がなく、入学式は新町小学校の講堂でした。卒業時には今の一代前の体育館が落成し、そこで行われました。

戦後の新学制がようやく定着し始めた頃で、学校には活気がみなぎっ

ていました。前年に野球部が甲子園に出場したこともあり、スポーツ・文化両面とも部活動が盛んでした。個性豊かな先生方が多く、正式なお名前より、先輩から受け継いだ「あだな」でみんな呼んでいました。今はもう殆ど故人となりましたが、私たち昭和三十二年卒は、ここ数年、非常によく集まります。二年に一度の一泊旅行(昨年は箱根、今年(信州)には百名近くが参加します。

また、「トップ32」というホームページももっていて、月に一度のパソコン研修会もやっています。

同窓生は理屈抜きで楽しい人間のつながり、交流の場が持てます。

初老の孤独は微塵もありません。これも津高での青春を共有したお陰

東京同窓会長に就任して



谷口 武

(昭和30年卒)

本年五月、図らずも東京同窓会の会長をお引受けすることとなりました。偉大な存在であった加藤精一前会長の後任としてはまことに非才ではあります。

が、役員、会員の皆様方のご支援を得て、発足後四十余年になる東京同窓会の更なる発展のためにベストを尽くしたいと存じております。

さて、昭和三十年卒業の私どもにとりましては本年は特に卒業五十年の節目の年で、同期の諸君と昨秋は鳥羽、そして今秋は東京で合同懇親会を開催、五十年前に戻って楽しい交歓の機会を持ちました。我々の在学中は、硬式野球部の甲子園出場、校歌の制定、体育館の新設等多くの嬉しいことにも恵まれ、また米本先生(ジャジさん)をは

じめ数多くの素晴らしい恩師にも接することのできた誠に充実した三年間の津高生活でありました。

その私どもも今や古稀を迎える年令にはなりましたが、サムエル・ウルマンの言うように「青春とは年令ではなく心の若さである。」を心に刻み、同期生一同今後とも一層元気で、世のため、人のために尽くす時間を持ちたいと思っています。



同窓会員都道府県別分布表

(平成十七年一月現在)

今年七月二十五日、同窓会報編集委員会で、事務局より、この分布表をもらいました。なかなか興味深い資料なので、一度会報に掲載してみたいという事になりました。最初、どこか一つくらいは空白県があるだろうと予想していましたが、結果は全国四十七都道府県全てに同窓生がいることがわかり、驚きました。さすが津高校だと思えます。

現在、住所が把握されている二七、



鳥羽前副会長追悼

家 令 和 俊 (昭和29年卒)

平成十七年二月九日早朝、奥さんからの電話で訃報を告げられた時一瞬全身の力が抜け落ちる様な虚脱感に襲われた。私にとって貴君の存在が如何に大きなものだったかを思い知らされた瞬間だった。

杉浦、辻岡、服部、鳥羽、家令……

昭和二十三年四月、三重師範学校男子部附属中学校入学時の整列順である。由来五十七年間、鳥羽君、貴君は常に私の身近にいてくれた。貴君は温厚誠実、人格識見共に優れた何事にも常に前向きに取り組む自ら率

先重範する指導力、並びにその実行力は抜群だった。永年にわたり、津高同窓会副会長として活躍され、例年の同窓会では、本部の総会等実行委員長、又、百二十周年記念事業の実行委員長として巾広く活動された。

貴君のこの世に残された功績は数あるが中でも特筆すべきは、津市内の機械器具製造業者の多くが市街地に立地し、公害問題、用地拡張問題等が山積みする中、その打開の為に工場を集団化する必要性を提唱し、津鉄工団協

● 都道府県別分布数

北海道——43	北陸——51	四国——50
北海道 43	富山 14	徳島 10
	石川 23	香川 16
	福井 14	愛媛 14
東北——63		高知 10
青森 5	東海——21,067	
岩手 7	岐阜 153	九州——96
宮城 25	静岡 179	福岡 56
秋田 7	愛知 1,631	福岡 1
山形 7	三重 19,104	長崎 7
福島 12		熊本 8
		大分 12
関東——3,554	近畿——2,051	宮崎 4
茨木 95	滋賀 147	鹿児島 8
栃木 48	京都 302	
群馬 30	大阪 831	沖縄——10
埼玉 374	兵庫 464	沖縄 10
千葉 502	奈良 272	
東京 1,425	和歌山 35	海外——223
神奈川 1,067		海外 223
山梨 13	中国——124	
	鳥取 6	総数——27,388
信越——56	島根 10	
長野 39	岡山 48	
新潟 17	広島 39	
	山口 21	

● 市町村別ランキング

①三重県津市 8,375	⑪三重県一志郡白山町 299
②三重県鈴鹿市 2,292	⑫三重県桑名市 258
③三重県久居市 1,460	⑬三重県伊賀市 250
④三重県松阪市 1,217	⑭三重県安芸郡芸濃町 241
⑤三重県亀山市 894	⑮三重県伊勢市 188
⑥三重県名張市 674	⑯東京都世田谷区 154
⑦三重県四日市市 673	⑰三重県安芸郡美里村 148
⑧三重県安芸郡河芸町 609	⑱愛知県名古屋市千種区 122
⑨三重県安芸郡安濃町 441	⑲三重県一志郡美杉村 120
⑩三重県一志郡一志町 376	⑳愛知県名古屋市名東区 119

物故者

謹んでご冥福をお祈りいたします。

客員	大松	石田	あ	や	三	T15	前川(寺島)のぶ
陳S3	近木	沢下	徳	弘雄	S2	浜田	かつき
6	山本	本水	尚	壽政	4	三輪	ゆすへ
7	速水	田口	佐	正計	5	小崎(林)	里美
10	森新	飯田	貞一	政正	13	井崎	川里
客10	中野	藤永	利郎	計則	15	前上	村ふさ子
11	飯近	松永	道夫	一郎	17	浅野	八重子
12	14	赤塚	明	道夫	18	白根	悦子
13	14	藤村	栄詮	明	22	加山	崎和郁
14	14	浅野(大島)	収宏	収宏	24	吉田	田中
19	17	井田	正義	正義	27	杉中	田井
19	20	飯田	正生	正生	27	宇田	田
20	21	北川	康祐	康祐	28	辻奥	地角
21	22	河合	恒人	恒人	29	北安	保
22	22	笠井(川本)	正路	正路	37		
22					49		

津高校進路事情

進路指導部 鈴木 達哉 (昭和53年卒)

新しい学習指導要領に基づく教育活動がはじまり、三年目を迎えました。

これで現在の高校生は全学年が新しい指導要領で学習していることになりました。生徒は「ゆとり教育」と呼ばれる中で「生きる力」を身につけることが求められ、一方、世間では学習内容や授業時間が大幅に削減されることで「学力の低下」が叫ばれている現状があります。

社会の変革期にあつて、教育のあり方そのものも大きく変化しています。

特にほとんどの生徒が大学に進学を希望する本校にあつては、国立大学の独立行政法人化、法科大学院、薬学部の六年制化をはじめとする新しい動き、大学入試センター試験におけるリスニングテストの導入や国立大学の後期試験廃止傾向、AO入試をはじめとする入試の多様化など、大学全体の流動化傾向についていふ翻弄されがちなことです。

しかし、こんな時期だからこそ、われわれは社会の波に吞まれることなく自分自身の考えをしっかりと持った腰の座った大きな人間を育てたいと考えています。大学入試をゴールとするのではなく、社会に出てから如何にその社会に貢献できるか、どのようににジョーンを持って人生を送るのか、を考えた動で、そのための基礎を作った大

学に送り出したいと考えています。

進路指導部では年間目標として①高い志と知的好奇心を育て、生徒一人一人の願いを大切にすること。②データを活用した進路指導(ガイダンス)をより充実させる。③生徒個人の能力を引き出し、将来を見据えて行動できる自立した生徒を育てる。の三点をあげています。そのために必要なことは何をおいてもまず授業の充実、そして自己理解と思考力・行動力だと思っています。

まず授業の充実についてですが、もともと本校教員の個々の力量には定評のあるところで、ある意味、一時間一時間の授業を真剣勝負でやっていることがもともと大きな力だと考えます。

しかし、個人個人の教員の授業力だけに頼るのではなく、生徒の自学自習による自立性を高めるためのシステムも改革も進行しています。六五分授業や二期制を取り入れることで授業時間を確保するとともに細切れにならずじっくりと授業に取り組む、考える時間や演習の時間を保証しています。また、「シラバス」を作成し、授業の狙いやプログラムを生徒に提示することで学習の質を高め、計画的な学習にもってけるように工夫しています。二年次からは類型別クラス編成(類型Ⅰは主として文系、類型Ⅱは主として理

系)を行い、効果的な授業や類型別、志望別のガイダンスができるようになるなど各生徒への細やかな対応ができる体制を取っています。

また自己理解を深め、思考力・行動力を高めるために三年間を六つのタームにわけて学習指導・進路指導の両面にわたるガイダンス、アドバイスのためのプログラムを組んでいます。それぞれの時期に個人面談週間を設けるとともに、学習習慣を定着させるための仕掛け、成績不振者をほっておかない手当て、学習意欲や知的好奇心を高めるための課外授業、志望別のガイダンスや情報交換会など、生徒が自分自身を高めていくことができるようなシステムの構築を図っています。一方で、「なりたい自分を見つける」ための企画も用意しています。オープンキャンパス等で大学を自分の目で見ることを薦めるとともに生徒自身が積極的に現場を体験するミニ・ツアー(名古屋大学の管島臨海実験所訪問、シャープ工場見学、三重大学医学部体験など)、大学模擬授業(夏休みに十日間十五分間で実施)、文化講演会、学部別・大学別受験座談会などは生徒の進路選択や学習への動機付けのための絶好の機会になっています。

(大学合格者数)

	国立	公立	私立	短大
(2005) H17年	211	48	687	7
(2004) H16年	246	41	811	11
(2003) H15年	214	54	681	11
(2002) H14年	244	49	749	12



「活躍なさっているありがたきを身にしみて感じております。最後になりましたが、今年三月の進路状況の報告をさせていただきます。国公立大学の合格者は約二百六十名で今年も県下ではトップの数字でした。関東方面へ飛び出す生徒が増えている反面、中部圏への進学希望者が減少していること、海外の大学への進学希望者も増える傾向にあることが特徴として挙げられます。このような結果をふまえながら、今後も現状に甘んずることなく一人一人の生徒が「津高で学べてよかった」と思えるよう努力をしてまいります。同窓会の皆様にはますますのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(主要大学合格者数)

	北海道	東北	筑波	お茶の水	東京	一橋	東京大	横国大	静岡大	金沢大	信州大	名古屋大	名古屋大	三重大	京大	大阪大	大阪府大	大阪市立大	神戸大	奈良大	広島大	慶応大	早稲田	上智大	青山学院	中央大	東京理大	日本大	明治大	法政大	立教大	南山大	名城大	龍谷大	京都産業大	同志社	近畿大	立命館	関西学院						
(2005) H17年	7	3	8	1	3	2	1	4	2	10	8	1	14	12	7	62	1	11	8	2	7	5	6	4	4	14	30	1	2	5	13	9	15	3	5	32	33	20	10	13	33	38	108	34	16
(2004) H16年	8	2	3	2	6	2	1	0	7	13	12	8	25	10	10	65	0	6	12	6	6	5	4	42	1	23	24	4	10	12	23	6	11	9	4	57	39	16	18	12	50	31	132	57	19
(2003) H15年	3	0	3	1	4	1	2	0	9	11	5	7	23	9	8	63	1	10	9	0	7	2	6	2	0	11	20	10	2	9	19	15	7	7	1	49	35	19	18	13	42	36	101	37	30
(2002) H14年	3	4	9	1	2	1	2	0	6	10	13	10	32	9	7	63	4	10	6	0	6	8	7	4	12	8	28	1	10	17	14	14	18	14	5	65	32	15	17	5	56	35	118	36	21

ボート部 清水 大輔君(二年)

国体で優勝!!

陸上部 小野 真弘君(一年)

国体で三位!!

クラブは現在、運動部三・文化部三の計四部があり、部活動加入率(五月一日調)は全体で八一%(男子七六%、女子が八五%)で、かなり高い割合になっています。

今年度の成績のトップは、何と言っても、ボート部の清水大輔君(二年、朝陽中)の活躍です。男子シングルスカルで、県総体・東海総体で優勝、全国総体は惜しくも四位でしたが、第六〇回岡山国体で見事に優勝しました。来年度はさらに飛躍が期待されます。



紙面の都合で、東海大会以上の試合に出場したクラブについて掲載します。

① 漕艇部(ボート部)

・東海高校総体(六月、愛知県)

男子シングルスカル

優勝 清水 大輔(二年)

男子ダブルスカル

市野 史憲(二年)

馬路 武志(二年)

中川健太郎(二年)

中山 幹太(二年)

・全国高校総体(八月、千葉県)

男子シングルスカル

第四位 清水 大輔

・国民体育大会(九月、岡山県)

少年男子シングルスカル

優勝 3分42秒47 清水 大輔

② 陸上競技部

・東海高校総体(六月、三重県)

男子五〇〇m競歩

2年10組 清水 大輔

水面を静かに滑り出す、心地良い風が頬を撫でていく、輝く波の美しさを感じながら、今日も僕は水と触れあう、この瞬間が好きだ。

戸惑いながらも、新しいことをやってみたくて入部を決意したボート部。最初の頃は何度か転覆をし、五月の川の水の冷たさが身にしみた。しかし、決めた以上は悔いのない結果を出したい。トップに立ちたい、そういう思いから毎日の練習にも熱が入った。

八月のインターハイでは四位入賞、そして、国体では優勝。中間地点五〇メートルでトップだと確信した瞬間「いけるぞ!!」と優勝を確信した。そして、ゴールした瞬間のあの

八月のインターハイでは四位入賞、そして、国体では優勝。中間地点五〇メートルでトップだと確信した瞬間「いけるぞ!!」と優勝を確信した。そして、ゴールした瞬間のあの

八月のインターハイでは四位入賞、そして、国体では優勝。中間地点五〇メートルでトップだと確信した瞬間「いけるぞ!!」と優勝を確信した。そして、ゴールした瞬間のあの

加藤龍一郎(二年)

女子一〇〇m障害

山本 亜紀(三年)

・東海高校新人大会

男子五〇〇m競歩

加藤龍一郎(二年)

男子四〇〇m障害

小川大次郎(二年)

・国民体育大会(十月、岡山県)

男子少年B円盤投げ

第三位 小野 真弘(一年)

③ 水泳部

・東海高校総体(七月、三重県)

男子一〇〇m・二百m平泳ぎ

加藤 貴耶(二年)

小玉 勝也(二年)

四〇〇mメドレーリレー

中瀬 優(三年)

加藤 貴耶(二年)

宮林 佳裕(二年)

小玉 勝也(二年)

④ 卓球部

・中部日本卓球大会(七月、石川県)

ジュニアの部 太田 和希(二年)

橋本 美穂(二年)

⑤ 音楽部

・中部大会(九月、長野県)

第58回中部合唱コンクール

銀賞 津高・松阪高との合同

・将棋部(十一月、福井県)

男子個人B級 菅原 高志(二年)

なお、本校の部活動にはありませんが、相撲で中西有斗君(二年)が東海総体、全国高校総体・国民体育大会へ出場しています。

新理科棟竣工

教諭(理科) 久米 令真(昭和56年卒)

旧理科棟は、現存する校舎の中でいち早く鉄筋化された校舎で、一番古い校舎(昭和三十八年四月、落成)と伺っていました。耐震に伴い新しく生まれ変わり、平成十七年七月に竣工しました。今までの薄暗い理科棟のイメージが一新され、明るく開放的になり、生徒にとって益々学習意欲が湧くものとなりました。

引越しの大作業は、生徒の協力もありスムーズに終えることができました。一階に物理、二階に化学、三階に生物

そして四階には今まで別棟にあった地学が設置され、全ての科目が理科棟に集結されることとなりました。もちろん今まで使用してきた施設・設備の中で使えるものはこれまで通り使用していくわけですが、時代に即応した太陽電池による自然エネルギーシステム、エレベーター・多目的トイレ・スロープなどのバリアフリー化、そして四階には天体観測ドームに加え、幅広く使用できる大講義室も新しく設けていただき、多くの生徒が多目的に活用できるように



なりました。

現在では「理科離れ」という言葉が、一つの決まり文句のように叫ばれていますが、ただ実験を「なし」、興味関心を誘うだけでは「理科離れ」を食い止め、更には理科のスペシャリストを養成することはできないように感じます。私の高校時代には、生徒実験がほとんどなかったのですが、今は非常に制約された時間の中で、大学入試では頻出の実験から実生活にも即した実験を数多く行っています。これも生徒に与える影響を考慮し、実習助手の先生方の大きな協力あつてのことです。

公教育の施設・設備に対して要求・文句は言っても、あまり感謝は言わない今の世の中の風潮ですが、私自身このようすばらしい環境で働かせていただくことに感謝し、生徒たちの進路希望実現のために頑張っていきたいと思っています。

津高同窓会のページが

平成17年11月1日より新しくなりました!!

先日、ハイキングに行ったとき、大阪のおばちゃんたちが、クリックしていると時間を忘れるわと、大きな声でしゃべっていたのを思い出しました。

社会の情報化の進展につれてコンピュータと人をつなぐヒューマンインターフェイスの改良が進み、だれにも易しく使い勝手がよくなってきました。クリックひとつでたいのことができてしまいます。

同窓会、年に1回集まればよしとしても、数年に1回、働き盛りのころは忙しく十数年に1回となることもあります。遠のけば、より遠く感じ、出にくくなるものです。

ホームページは、場所や時間、それに国境さえ問いません。接続環境さえ整えば、いつでもどこでもアクセスできる優れたものです。遠くはなれた同窓生をサイバースペースが再び結び、つなげていくことができるのです。そしてまた、新たな出会いも生まれることでしょう。

津高同窓会のページのリニューアルを機会にコンテンツを充実させ、同窓生のコミュニケーションの場を広げていきたいと考えています。また、学年ごとのコミュニケーションの場として掲示板を設置する準備もできています。多くの方のアクセスと情報交換によって本サイトが豊かになっていくことを期待しています。是非一度、下記のアドレス(URL)にアクセスして、ご意見をお寄せください。URL中の「~」の記号はチルダと読み、shiftキーを押しながら「.」キーを押します。

◎津高同窓会ホームページ <http://www.mietsu.tsu.mie.jp/~tsuko-d/>



各地で同窓会開催

東京同窓会

「楽しかった」「先輩の豊富な経験談最高」今年の若手会員の声でした。

東京同窓会は百三十人の出席のもと、五月二十一日霞ヶ関ビルで行われました。津高創立百二十五年の記念すべき年を迎えて、「ふかまるふれあい、ふるさとの輪」をテーマに、話題豊富な会になりました。

総会では、十五年の長きに亘り会長として今日の同窓会を築いていただいた加藤精一会長(昭和22年卒・陳川)

が本年をもって退任され、新たに、谷口武氏(昭和30年卒)が会長に選任されました。新旧会長のご挨拶に続き、津から出席いただいた竹林武一本部副会長からユーモアいっぱいのご挨拶をいただきました。また、恩師である飯田宏、佐野元子、在京の金子保先生に

もご出席いただき津高時代の先生との再会でも深まりました。

懇親会では年次別で旧交を温め、昨年に続き地区別懇親会で出身地の町村、学区ごとに十地域に分かれての語らいで、「ふれあいが深まり」、「ふるさとの輪」が広がりました。又、今年度卒業の新会員二名のフレッシュで力強い決意表明にも拍手が沸きました。

会場には、展示コーナーを設けました。鈴木幸雄津市東京事務所長のご協力を得て、新津市誕生、なぎさまちの紹介などを、また津高の沿革、学び



舎の今昔などを展示紹介しました。同窓会本部事務局から出席いただいた佐々木とし子様にも、津高同窓会美術展の紹介を兼ね、津高のコーナーに出ていただきました。また、会員の方々の日常の活動について、ハグルーフ、十デー、マデ、演劇、絵画、写真、同人雑誌、甲子園出場記など文筆活動、和服のリメイク、障害者ボランティアなど永年培ったすばらしい成果が展示紹介されました。三つの校歌の合唱、エール交換と続き、来年の再会を約して閉会しました。

(昭和33年卒 輪番幹事団)

九州同窓会

第十六回津高九州同窓会が五月二十九日(日)例年通り福岡国際ホールで開催されました。

本日より、会長の川喜田貞久氏(昭

考えて、津高九州同窓会会報の第7号

卒)が「郵政民営化の現状」と題して、大問題を分かりやすく解説して下さい、川喜田会長から「昨今の厳しいテーマを、本当に感心して聞いた」との言葉をいただきました。喜田氏の講演内容は前会長の鈴木匠氏(昭和16年卒)が、その全容を多くの会員に伝えようとの

併問題など郷里に関するお話があり、学校長からは三重県の高校学力レベルを混じえて母校の近況報告をいただきました。

持ったことが出来ました。

総会では、川喜田会長より津市の合併問題など郷里に関するお話があり、学校長からは三重県の高校学力レベルを混じえて母校の近況報告をいただきました。



顔にふれ、ラテンダンスのレッスンまで飛び出した会場内は、さながら開催

たコスタリカの生活を、すばらしい自然とともに紹介していただきました。

九月十七日(土)、真夏を思わせる残暑の中、津高校・同窓会本部より来賓の方々にご出席いただき、平成十七年度津高名古屋同窓会総会が開催されました。

名古屋同窓会

総会報告として配布されました。

最後は津中・津高女・津高の校歌と津高が甲子園出場の時歌われた、喜田氏作曲の応援歌を斉唱して、盛会のうちに散会しました。

西孝先生から「麻・絹・綿・羊毛」と

最後に京都産業繊維大学名誉教授の

語り合い楽しく会食、懇談しました。

懇親会の中でも全員が母校の思い出を

を温めたことが披露されるとともに、

多数の同窓生が参加し、大いに旧交

美術展や世界遺産記念旅行等が開催さ

立百二十五年を記念してゴルフコンペ、

藤岡同窓会副会長は挨拶の中で、創

られていたことが紹介されました。

加で過去の盛会を取り戻したい」と語

同窓会設立四十回を迎える。多くの参

挨拶で、生前中井会長が「来年は京都

を一同でお祈りしました。中西幹事の

ました中井会長始め三名の方のご冥福

開会に先立ち、今年九月に逝去され

した。

迎えしホテル平安の森京都で開催しま

津高より白井教頭先生、菱井先生をお

同窓会本部より古市・藤岡副会長、

里花氏(昭和54卒)の「ぶらびだ!コ

スタリカ」保育士として二年間赴任し

たコスタリカの生活を、すばらしい自

然とともに紹介していただきました。

あまり知られていないコスタリカの素

顔にふれ、ラテンダンスのレッスンま

で飛び出した会場内は、さながら開催

第三十九回津高京都同窓会は、時代

祭の興奮が覚めやらない十月二十三日

同窓会本部より古市・藤岡副会長、

津高より白井教頭先生、菱井先生をお

迎えしホテル平安の森京都で開催しま

した。

話に弾みでした。締めくくりに恒例の津高クイズ。三重校の皆様の勝利にて楽しいひと時を終え、それぞれの校歌に再会を託して、閉会いたしました。

(昭和54年卒 水谷幸代)

京都同窓会

中の愛知万博・外国パビリオンに足を踏み入れたかのよう。一四〇余名の出席者の間には、あつという間に「コスタリカ行きたい病」が蔓延し、その後の懇親会もヒートアップしたまま、会話が弾みました。締めくくりに恒例の津高クイズ。三重校の皆様の勝利にて楽しいひと時を終え、それぞれの校歌に再会を託して、閉会いたしました。

(昭和54年卒 水谷幸代)

に詣で、散会した。なお、記念に県科

まちでの昼食後は、一身田の高田本山

物故七十九名の追悼法要。新港なぎさ

わらめ明快な授業を受け、津観音では

宏先生(九十三歳)のお元気で昔と変

教室をお借りしお招きした恩師、米本

ルで晩餐談話。二日目は、母校津高の

席は四十六名。一日目は津市内のホテル

中一八八歳寿三重大会を開催した。出

が六月一日・二日の両日にわたって津

今年傘寿を迎える昭和十八年卒業生

温故而知新可以為師矣(論語)

きますようお待ちしております。

予定していますので、是非参加いただ

の森で、第四十回京都同窓会の開催を

来年十月二十二日にホテル京都平安

年の再会を約して散会しました。

に驚きを持って聞き入り、二時過ぎ来

している繊維のルーツや用途の違い等

題して講演を頂き、普段何気なく手に

来年十月二十二日にホテル京都平安

年の再会を約して散会しました。

に驚きを持って聞き入り、二時過ぎ来

している繊維のルーツや用途の違い等

題して講演を頂き、普段何気なく手に



その後楽しい宴会に移った。

(幹事 岩田直衛 記)

そして八十一名の物故者の冥福を祈つて、会員の大津市坂本の西教寺管長山本孝圓君の読経の中、黙禱が行われ、

恒例の陳川五五会同窓会は平成十七年六月四日ブラザ洞津で開催された。

参加者は二十名、東京在住の斎藤竹生君が卒業後はじめて参加したのをはじめ、茅ヶ崎市から松垣有彦君、名古屋から吉田栄一君、生駒市から佐脇義次君など遠来の会員の参加があった。

陳川五五会

学技術センターが新開発したアコヤガ

イの光沢粒子利用技法による文字入り

グラスペーパーウェイトを出席者全員

に配った。

(昭和18年卒 幹事一同)

同窓会



去る八月六日(土)、津センターパ
レスホール、津都ホテルを会場に、平
成十七年度陳川・三重校・津高同窓会



総会・パーティーが開かれました。当
日の参加者は七二六名でした。
総会では、川喜田同窓会長の挨拶

お知らせ

平成十八年度 同窓パーティー

日時 平成十八年八月五日(土)
午後三時より

場所 津センターパレスホール
津都ホテル

担当学年幹事 昭和48年卒(代表 土性 明)
昭和60年卒(代表 奥山 真司)

平成十七年度の総会・ パーティーを終えて

実行副委員長 東口 大介(昭和59年卒)

平成十八年度

同窓パーティーのご案内

実行委員長 土性 明(昭和48年卒)

平成十八年度同窓パーティーは、昭和48年卒と昭和60年卒が担当させていただきます。

今夏の同窓パーティーでの講演は好評でした。そのあとを受けての幹事、少々荷が重いと云うのが正直なところですが、歴史と伝統のある津高の名に相応しい同窓会になるよう、頑張りたいと思います。総会パーティーは、こ

に続き、水越学校長より、祝辞をいただきます。十五名の来賓の方々の紹介の後で、代議員会報告と続き、無事に終了しました。

続いて今回のサブテーマ「笑いと健康」と題して日本笑い学会副会長・医師の昇 幹夫先生の講演がありました。

「笑いが心と体を強くする」と笑いの大切さを冗談を交えながら楽しくお話いただきました。

長生きの秘訣は…

さからわず

いつもニコニコ

したがわす!

昇 幹夫



その後、竹林副会長の乾杯のご発声で、パーティー・懇親会が始まりました。

た。

本年度の大会テーマ「君の笑顔が今日輝いて」のもと、パーティーは盛り上がりしました。

次年度幹事学年の挨拶に続いて校歌が斉唱され、和やかな雰囲気の中、パーティーが終了しました。

参加していただいた同窓生の皆様、本当にありがとうございました。

そして黒川実行委員長をはじめとして幹事役を務めた昭和47年卒、昭和59年卒の皆様、本当にお疲れさまでした。

事務局だより

▼同窓会報第四三号をお届けします。

一家族で一部の送付といたしましたので本年は二万三千部の発送になりました。

▼創立二五周年記念事業は、美術展

◎津高同窓会事務局

TEL・FAX 059-229-7331

◎同、メールアドレス

tsukou-d@axel.ocn.ne.jp

◎津高同窓会ホームページ

http://www.mietsu.tsu.mie.jp/~tsuko-d/

▼事務局

月・火・水・金曜日

午前九時半～午後四時半

開局しております。学校にお越しの際は、同窓会室にお立ち寄り下さい。

とゴルフコンペ、それに東欧の文化遺産をめぐる旅が企画され、それぞれの行事に多数の会員の方々に参加をいただき盛況裡に終えることができた感謝いたします。また、同窓会の縦の交流を深める最高の場となりました。

▼十一月一日よりホームページをリニューアルし、アドレスも変わりました。ぜひ一度アクセスして下さい。また各学年の掲示板も作りましたので書き込み等お寄せ下さい。